

実践報告

インターンシップ学外実習に関する調査－第4報－

太田あや子、森 喬夫、河合一武、杉山仁志、桂和仁、星川秀利、
浜田琴美、大橋慶子、駒林隆夫、本多由美子、渡辺喜弘、山岸博之

On the survey of students of internship in sports business-4-

Ota Ayako, Mori Takao, Kawai Kazutake, Sugiyama Hitosi, Katura Kazuhito,
Hoshikawa Hidetoshi, Hamada Kotomi, Ohashi Keiko, Komabayashi Takao, Honda Yumiko,
Watanabe Yoshihiro, Yamamagishi Hiroyuki

Abstract

The purpose of this paper is to clarify our students needs to internship course in sports business. Students responded to questionnaire which has 63 items. The following results were obtained.

- 1 Many students wanted to get information of their internship before their practicum.
- 2 Many students are satisfied with their internship and they recommended this course for their juniors.
- 3 50 % students didn't want to work same job field what they practiced.

キーワード：授業実践、学外実習、選択授業、インターンシップ、授業評価

Key Word：internship, course evaluation

I はじめに

インターンシップとは、「学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと」と定義されている（文部省1998）。

平成9年から当時の文部省が関係省庁と連携して提唱し推進してきたインターンシップは、今日広く企業や教育機関に受け入れられているおり、文部科学省の平成14年度インターンシップ実施状況調査によれば、14年度は大学の46.3%（317校：30,222人）、短期大学では

23.9%（117校：3,725人）で実施された。平成8年度から14年度にかけて、実施校は大学・短大とも4倍以上になっている。14年度に初めて大学の参加者が3万人を越えたことなどをうけ、文科省も各大学のインターンシップ推進経費の補助や、現代GP（現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム）公募テーマにも「人材交流による産学連携教育」を取り入れ、平成16年度実績としてインターンシップ関連の取り組み8件が選定されている。

スポーツマネジメント専攻生を対象とした米国のStratta(2004)によれば、学生はインターンシップ実習の関心事は「就職活動の機会を得る

こと」とし、中でも「個人の能力開発」と「専門家としての職業や業界とのつながりを得る」ことに重点をおいていると述べている。そのためには実習先に教育的な環境が整っていて、専門家としてのモデルとなるような人物の存在が大きな意味を持つと学生は考えていることも報告されている。このように学外の企業や団体等で行われるインターンシップは大学、学生、社会にとって大きな意義あるものと考えられている。

本学においても健康・体育専攻は創立時から平成10年度までは「社会体育実習」として2年次前期に授業が開設され、平成10年度までは必修科目、平成11年度から選択科目となった。平成14年度生からは「インターンシップ」と科目名を変更して、文科省関連の助成金を得て1年次春期休業期間に現場就労体験実習を行ってきた。16年度からは健康・栄養専攻の学生の履修も可能となり、健康・体育専攻100名（男子43名、女子57名）、健康栄養専攻8名（女子8名）が「インターンシップ」を履修した。

また、本年度は健康・体育専攻の学生が本学始まって以来の多人数であることと、編入学希望者にも履修を薦めたことから履修者が100名を越える大規模な学外実習となった。

本稿は新たに健康・栄養専攻学生を加えて3回目を迎えた「インターンシップ」の授業で学生が何を学び、何を得ているかを明らかにし、従前の報告をふまえた学生指導上の改善効果を確認し、今後の指導上の基礎資料を得ることを目的とした。

Ⅱ インターンシップの授業概要

インターンシップの授業概要は以下の通りである。両専攻1年生が対象で、2単位、事前事後の学内授業が4回と、学外での現場実習が2月～3月（一部野外活動等は12月から1月）に原則1日8時間、10日から2週間の日程で行われた。実習先選定に当たっては、協力企業や組織、スポーツクラブの中から選ぶか、学生の出身地にあり学生が探してきた自己開拓実習

先から選ぶことができるようにした。第3希望までを各自で決定し、担当教員が相手先と連絡をとって最終的に実習先が決定される。本年度は大手スポーツクラブが実習生受け入れを中止したため、例年よりも第二希望に回らざるを得ない学生が多かった。冬季休業中に学生は実習先を訪問し面接を受け、実習の打ち合わせを行った。実習中は毎日その日の実習内容や反省点を記入した実習日誌を現場の指導者に提出する。また事後の授業への出席が義務づけられており、その際に実習ノートの最終ページのレポートを作成し、実習先へのお礼状のコピーを添付して見まわり担当教員へ提出する。

16年度の実習先所在地は北海道から沖縄までの広い範囲にわたっている。学内での授業は1年次に事前4回、事後に2年次オリエンテーション1回の計5回実施された。

学内授業や連絡、実習参観等の学生指導には健康・体育専攻の専任教員10名（教授1名、助教授4名、専任講師3名、助手2名）、健康・栄養専攻の専任教員4名（教授1名、助教授1名、専任講師2名）があたり、体育専攻では他の教員も実習先訪問指導に協力している。指導教員は実習先との連絡、学生の事前指導や情報提供、学外実習中の訪問指導、事後の実習日誌の評価等を担当する。

Ⅲ 調査方法

インターンシップに関する質問紙調査（20項目63問）を、2005年4月の2年次オリエンテーション終了後のまとめの授業で実施した。回答数は108名（実習参加者の100%）であった。

収集した16年度のデータを単純集計し、必要に応じて実習施設別、性別専攻別に分析した。

Ⅳ 結果

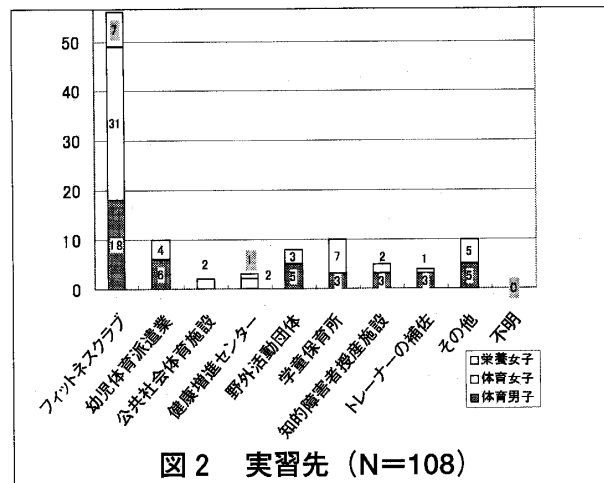
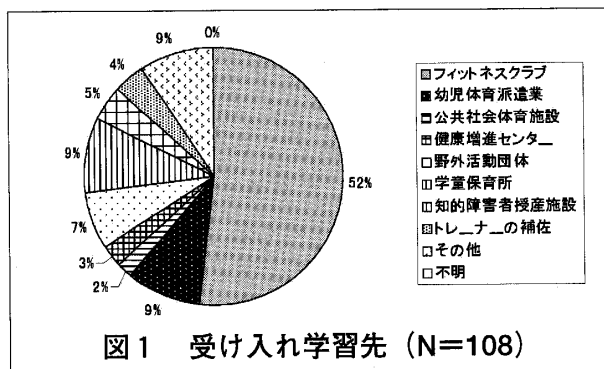
1. インターンシップの実状

1) 受け入れ実習先

平成16年度の実習先は図1、図2のとおり

である。16年度で最も多い実習先は民間のフィットネス・スポーツクラブで(52%、56人)、次いで幼児体育派遣業と学童保育(9%、10人)、野外活動団体(7%、8人)、知的障害者授産施設(5%、5人)、トレーナーの補佐(4%、4人)、医療・健康増進施設(3%、3人)、公共社会体育施設と(2%、2人)であった。その他にはスポーツショップ2人等が含まれている。この傾向は従来とはほぼ同様といえる。「フィットネス(スポーツ)クラブ」の割合の増加には健康・栄養専攻学生の参加が影響している。「幼児体育派遣業」はサッカー指導が中心となるため、公認C級コーチの取得希望者の参加が多かった。

実習先希望順位を図3に示した。第一希望となった者は81%でわずかながら減少した。これは前述の大手スポーツクラブの受け入れ中止が影響している。また、「トレーナー補佐」を第一希望とした者は実際の参加者よりも多く、適性等を考慮して本人と担当教員で相談した後、人数を絞っている。また、「スポーツショップ」での希望者も多かったが受け入れ先が少

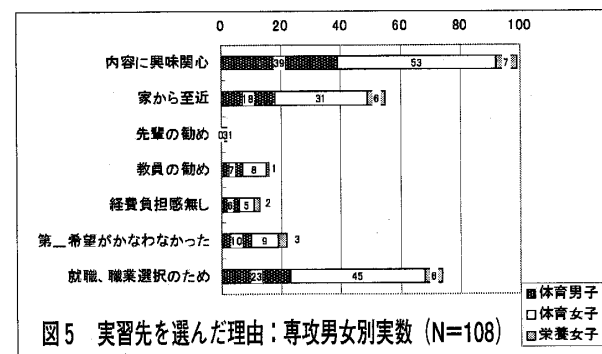
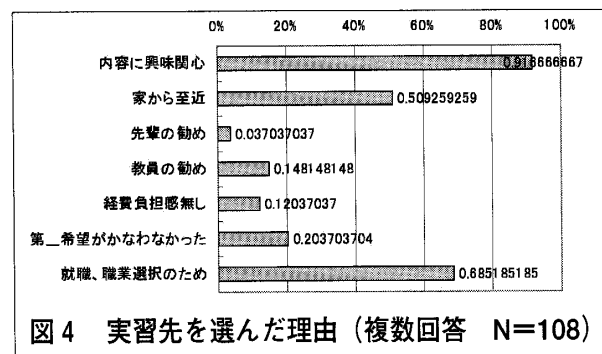
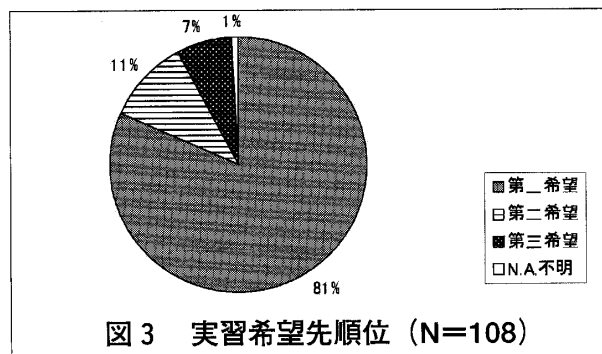


ないため人数を限定した。

2) 実習先選択理由

実習先選択理由として用意した設問に「あてはまる」と答えた者の割合を図4、5に示した。16年度も例年と同様に、「内容に興味関心があった」とする者が92%ともっとも多く、次いで「就職や職業選択のため」が69%、「実習先が至近であること」が51%との順となっている。「第一希望がかなわなかった」も20%あった。「経済的な負担がないこと」を選んだ者は12%(11名)で昨年の5.2%から倍増した。

前年と比較して、選択理由に大きな差はないが、「内容に興味関心があった」が90%を越え、学生の関心が強いことを示している。また、経



経済的な負担の有無が実習先決定に影響する学生が存在することがわかり、今後の実習先の紹介や新規の受け入れ先開拓、この点を考慮する必要が示唆された。また、「実習先が至近であること」は14.8ポイント増加しており、16年度の学生は実習内容以外の要素も考慮して実習先を選んでいる傾向がみられる。

3) 実習期間時期

16年度の実習期間は、3月下旬の者が37.0%と最も多く、次いで2月下旬(26.0%)、3月上旬(25.0%)、3月中旬(11.0%)であった(図6)。平成15年度は3月上旬の者が31.6%と最も多かったが、16年度は下旬に集中する結果になった。これは受け入れ施設が、児童の春季休業中のプログラムに実習生を割り当てるなど受け入れの態勢の違いによるものと考えられる。16年度春期休業期間中には、体育専攻は冬季野外活動実習(4泊5日)が、栄養専攻はスポーツ医学実習の集中授業(4日間)が開設されており、その期間を避けて実習を依頼することも多かった。

また、実習施設や時期の決定は11、12月の平成16年内に決定した者が29%、平成17年1月が31%、2月が34%、3月が3%と昨年より遅い傾向が見られた。決定時期については、60.2%の者が「適当であった」とするのに対して、20.4%の者が「遅い」と感じている。この数字は例年と同率であり、春季休業時の予定を立てるためにも、なるべく早期に決定できるよう受け入れ先と折衝していく必要性がうかがえる。

4) 実習の形態

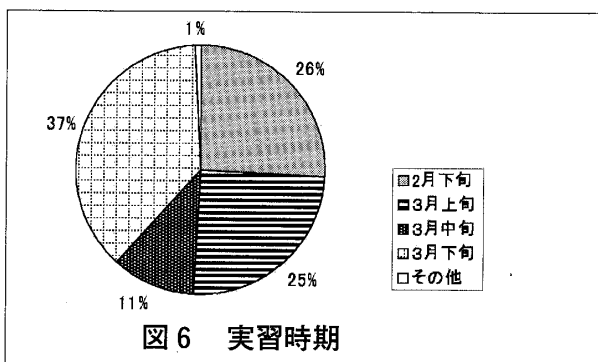


図6 実習時期

16年度の実習形態は、毎日実習先に通う「通い」のが83%ともっとも多く、ついでキャンプ場などの野外活動施設に宿泊滞在する「現地滞在宿泊」型(14%)、通いと宿泊の混合型(3%)であった。今年度は子どもを引率して宿泊する形態はなかった(図7)。

実習先への移動にかかる時間は30分以内の者が60%をしめる一方で、1.5~2時間越えの者も15%いる(図8)。

本年度でも最も多かったのは「通い」の実習であった(83%)が、野外活動施設での宿泊を伴う「現地滞在型」の実習が14%と増加した。それを反映して通勤時間は1時間以内の者が多かった。

5) 実習内容

実習内容は実習先により多様であるが、もっとも多いのが清掃や備品の整理等の「施設設備管理」(77.8%)、例年最も多かったアシスタントも含めた「実技指導」は69.4%で2番目になった(図9, 10)。ついで、実習先での様々なプログラムに参加する「プログラム体験」(44.4%)、施設のフロントでの「受付」業務(36.1%)、書類整理やコンピューターへのデー

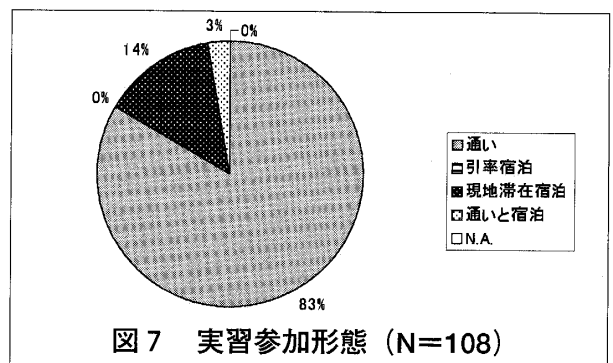


図7 実習参加形態 (N=108)

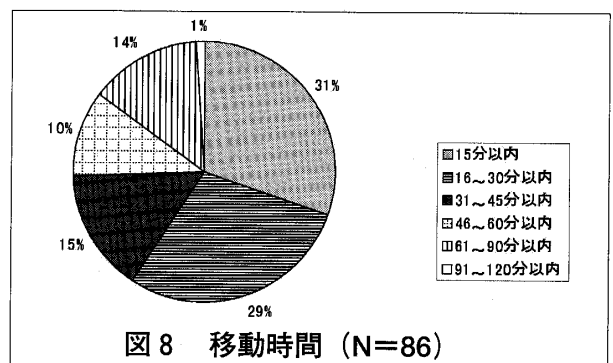
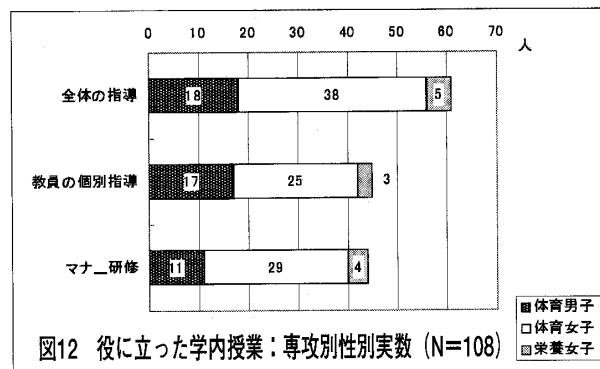
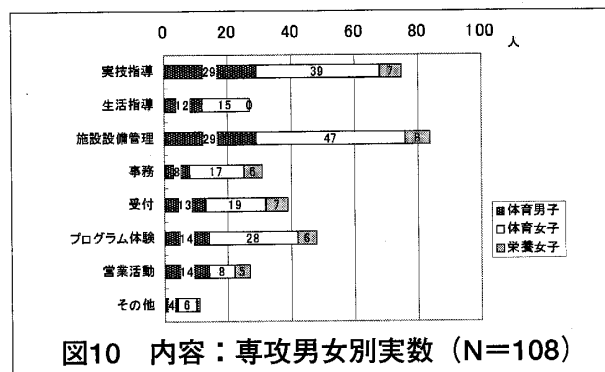
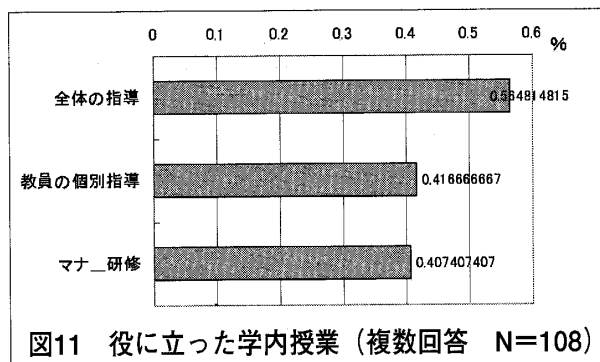
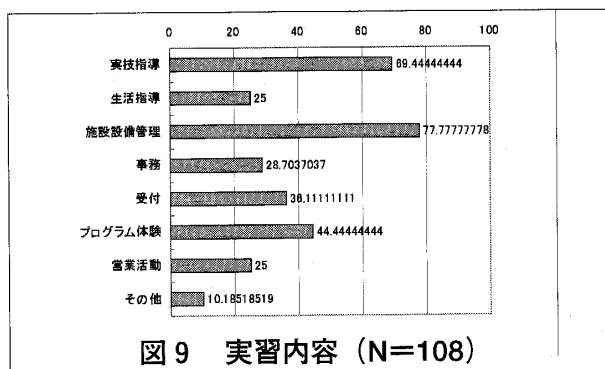


図8 移動時間 (N=86)



タ入力・データ整理、指導記録コメント記入などの「事務的作業」(28.7%)であった。ちらし配りなどの「営業活動」と子どもの躰などの「生活指導」がそれぞれ約25%であった。

16年度はスポーツ・フィットネスクラブでの実習が増加したことから、クラブ運営に関する項目が増加した。

6) 実習経費

77%の者が、実習に際し何らかの経費を負担しており、そのうちの40%がその金額を「高い」としている。主たる経費は実習先への交通費や食費で、平均値がそれぞれ9,952円と4,540円であった。最高額はそれぞれ40,000円、15,000円である。宿泊費を負担した者は19名で平均8,200円、最高金額が50,000円、実習のための物品購入者は23名おり平均3,102円で最高額は20,000円であった。本年度も経費の負担金額は実習先によってかなり幅があることがわかる。

本年度に関しては、「通い」の実習や、野外活動施設での実習で経費の負担が多かった。

2. 事前授業に関する項目

16年度は学外実習へ出る前に履修者全員を対象に事前の授業が3回行われた。第1回目と第2回目は実習先へ提出する関係書類の作成を中心とした内容で11月に、第3回目はマナー研修と題して社会人としての実習先での行動の注意点やマナーについて、セントラルスポーツ株式会社マリンレジャー事業部から外部講師を招いて講演を12月に行った。また、希望者に対して比企広域消防本部の協力を得て「普通救命講習会」を補講期間に実施し、人工心肺蘇生法の資格取得の機会を設けた。実習先への提出書類確認や実習先への連絡方法などの指導は、この授業が時間割からはずれたことをうけて、11月から実習開始までに実習先別に担当教員が学生に個別に指導した。また、今年度は提出物の準備が期限に間に合わない者はその時点で実習の履修を中止させることとし、学生の実習に取り組む姿勢を早期に確立させるようにした。

1) 学生による学内事前授業の評価

事前の学内授業が実習に役立ったかどうか学生の評価をまとめたものが図11、12である。

全体指導の指導が56%、教員の個別指導が42%、マナー研修が41%であった。この結果は平成15年度に3項目全てについて約半数の学生が「役立った」としている結果と比べて低調といえる。これらの指導から得た実習の事前情報については42%が「不十分であった」とした(図13、14)。

前年度に比較すると、全ての項目について役立ったとする者の割合が減り、現行の実習事前指導方法について検討する必要性が明らかとなった。従来から基本的にはスポーツ・フィットネスクラブでの実習を想定した事前指導を応用してきたが、今日多様化する実習先に合わせた事前指導の必要性が感じられる。今後は学生が必要としている事前指導の内容を把握して、実習内容を改変するなどの対応策を考えていきたい。

2) 学生の事前準備状況

学生自身が行った事前準備についてまとめたものが図15、16である。就職や職業選択について考えた者が73%、具体的に実習に必要な技能や知識を学ぶ努力をしたとする者は41%、

自ら実習に関する情報を手に入れようとした者は37%であった。

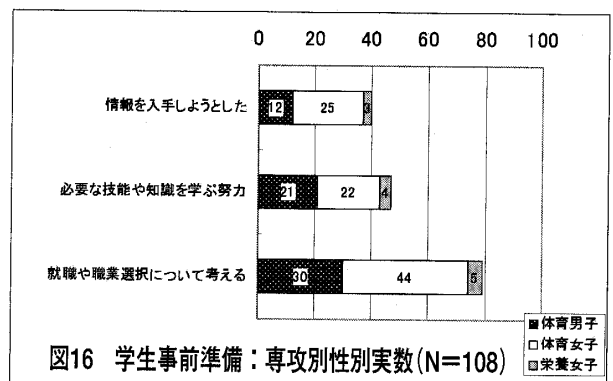
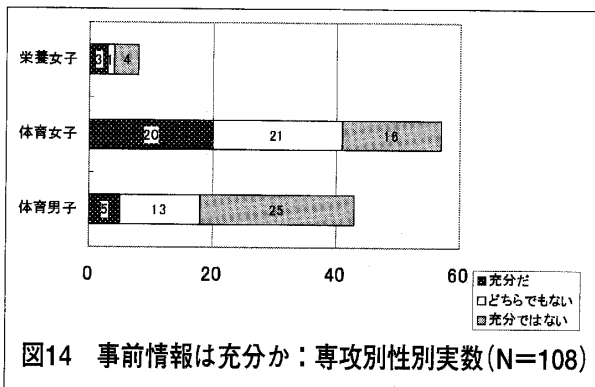
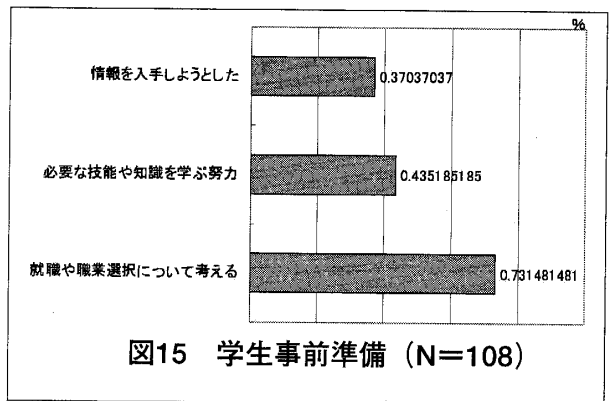
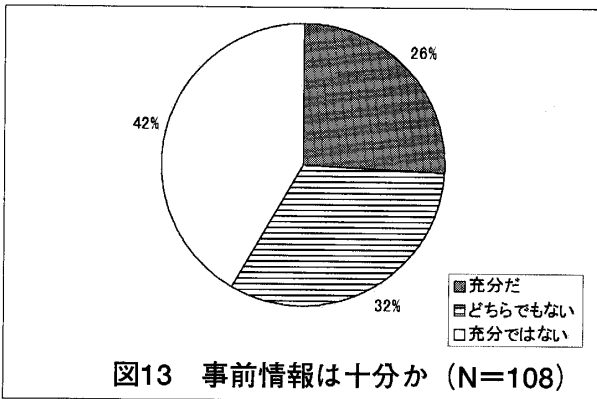
「実習先の情報を入手しようとした」はやや増加したものの、他の項目ではわずかながら減少している。また、実習生自らが取り組むべき具体的な「実習先の情報入手」や「実習に向けた技能知識の学習」は4割程度と充分とはいえない状況が続いている。

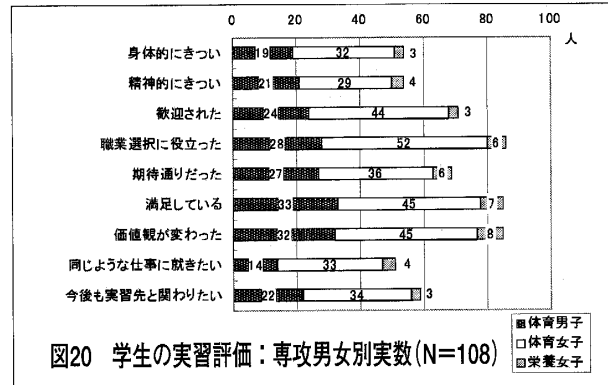
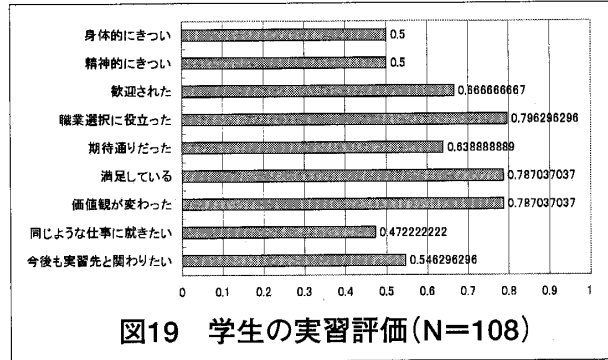
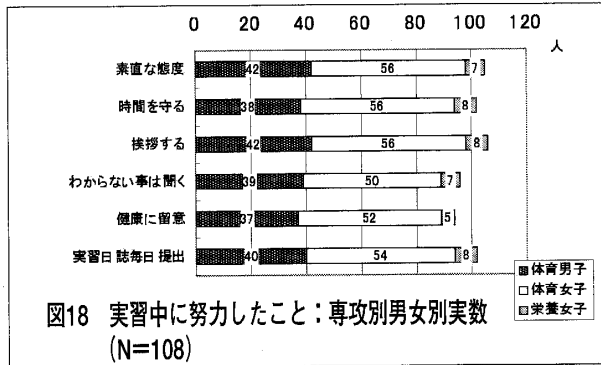
3. 実際の実習に関する項目

1) 実習中に努力したこと

実際の実習中に学生が努力した事項についてまとめたものが図17、18である。最も多くの者が努力したことは「挨拶をする」で98%、次いで「素直な態度で実習に臨む」が97%であった。ついで「時間を守る」と「実習日誌を毎日提出する」(94%)、「わからないことは聞く」(89%)、(81%)、「健康に留意する」(87%)であった。

15年度と比較しても、大きな違いは見られないが、「挨拶」が人とのコミュニケーションの第一歩であることを強調されたマナー研修の外部講師の指導が今年も役立っていると思われる。





2) 学生による実習の評価

16年度学生の実習に対する評価を図19、20にまとめた。50%の者が実習は「精神的にも肉体的にもにきつい」としているが、67%の学生が実習生としての自分が実習先に歓迎されたと感じている。80%の者が実習は「職業選択に役立った」と評価しており、64%の学生が「実習は期待通り」とし、79%が「実習に満足」し、「価値観が変わる影響を受けた」としている。一方、実習と同様の仕事に就きたいという希望や、今後も実習先と関係を保ちたいとする者は5割程度であった。

昨年と比較すると、実習先で「歓迎されていると感じた」者は10ポイント増加し、「満足している」者も増加したが、「職業選択に役立ったとした」者は約10ポイント減少した。実習と同様な仕事に就きたいとする者が47%であること等をふまえて考えると、学生の職業観にこの実習が大きな影響を与えており、仕事の現実に触れ、自分の職業適性が理解できた故に、かえって今後の就職を考える時に困難さを学生が感じていることが推察される。実習で得た経験を前向きに活かしていくためにも今後は就職

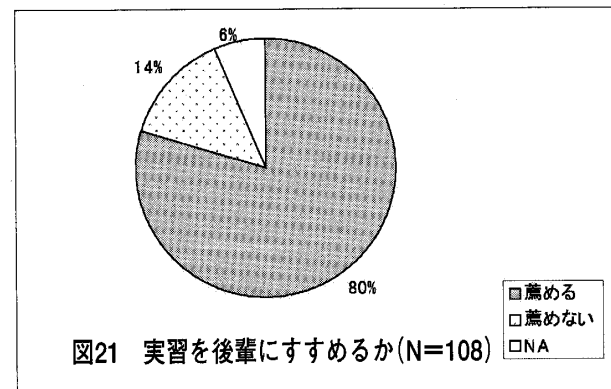
に関する部局と連携してことが重要であろう。

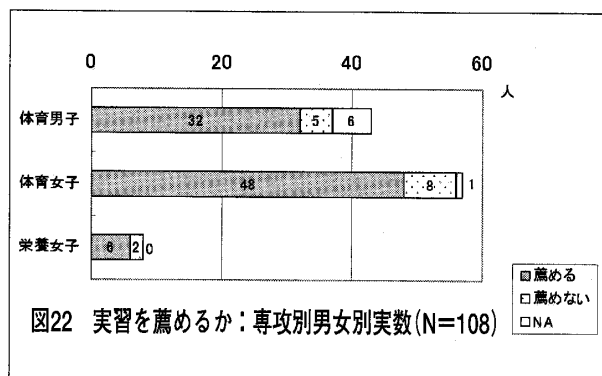
4. 後輩へのアドバイス

本年度は80%の学生がインターンシップの履修を後輩に勧めるとした(図21、22)。

勧めないとした者15名のうち実習内容をあげた者6名が最も多く、次いで人間関係をあげた者5名、精神的なつらさをあげた者2名、その他2名であった。

勧める理由では、例年と同様に指導者や実習施設の人間関係のよさ、実習内容や実習指導の充実、会員さんや子ども達とのふれあい、自分を見つめる機会、学校ではできない体験であることなどがあげられている。





5. 実習実施の時期

実習時期についての意見は「現状でよい」とした者が78%、「もっと早い時期がよい」が15%であった。「現状でよい」とする理由は、前年と同様に日数的に余裕があること、1年間であっても専門の勉強を終えた後が安心であることをあげている。「もっと早い時期」を望む者で1年2月をあげた者が5名おり、その理由として春休みを就職活動等有効に活用したいという希望が述べられている。また、4名が受け入れ先の年度末による多忙をあげ、2名が就職について体験をとおして考えるためには時期的に遅いことなどをあげている。

V 考察

調査結果から16年度インターンシップを検討し、今後のインターンシップ実習授業指導への課題をまとめると以下ようになる。

平成16年度の実習は、健康・体育専攻学生の学生増と健康・栄養専攻での実習開始と相まって近年にない大人数の履修となった。そのため、学生の量的な拡大とともに、実習に取り組む姿勢などの質的な差や多様性が増加した。このことはある程度予想されていたことでもあったので、履修への迷いがあったり、書類作成等の事務手続きが不十分だったりする学生は、その時点で履修に向かないと判断して、とりやめのような手だてをとって、実習参加への意識を高めてきた。また、業界大手のスポーツクラブの方針転換で20名あまりの学生が第一希望での実習先が確保できず、第二、第三希望での履

修意志の確認等も行った。しかしながらそれでも実習先が確定した2月の時点で実習中止を申し出た学生も2名いた。そのため、当初150名ほどいた履修希望者は最終的には108名となった。

以前からの調査結果からも学生の職業意識醸成は、効果的な実習に欠かせないことが明らかとなっている。16年度の調査から、インターンシップを履修した学生の多くは就職や職業適性の理解を深める機会としてこの実習を認識し、従来とかわらない参加動機や態度で実習に取り組んでおり、後輩にも履修を薦めていることが理解された。しかしながら、実際に現場を体験することによって、学生は自分の認識の甘さや就業の困難さを痛感して、実習体験がその後の職業選択に結びつくとは必ずしもいえないことも理解された。実習後に進む方向性が確信できた者と、逆に体験を通して自分の適性や職業観を新たに構築する必要がある者が存在しているため、実習前の意識と同様に自習後の学生の職業感を現実に即して醸成していく大学や教員の努力が必要であることが理解された。

そのためには「十分ではないとされた」事前指導の内容を検討する必要がある。また、学生は受け身的な教員からの情報提供を安易に期待していることも推察され、学生自身による情報収集、実習に必要な授業履修など、自らが活動することによって、仕事内容への理解を深め、実習に向けた準備をすることの大切さを学生に理解させることも必要である。

また、今まで提供してきている情報に加えて、調査結果のような先輩の体験を後輩に伝えることが、より意欲的な履修生を増やし、不足しがちな情報提供に役立つと考えられるため、ガイダンス時の体験談披露や個人情報保護に抵触しない範囲での文書による体験コメント掲示等の具体策を次年度に講じたい。

実習の時期については、受け入れ先の都合や本学の集中授業の関係で3月末が多い。集中の授業履修や受け入れ先の都合で、インターンシップ実習が3月末にずれ込む可能性が高いことを事前に告知し、それに納得したうえで、集中

授業やインターンシップ実習を履修するように学生に指導することも学生の不満を少なくするために必要であろう。短期大学生の就職活動の時期が早期化したことによって、1年生の春から活動に取り組む必要がある企業がある一方で、準備不足のまま学外に学生を実習先に送り出すことは難しいと考えられる。当面はこの時期に実習を行わざるを得ないことから、就職活動支援との関連を考慮し、関係部局とも連携して時期を考えていくとともに、できるだけ休業中の早い時期に実施できるように受け入れ先と交渉することも必要となろう。

まとめ

平成16年度入学生からは「インターンシップ」の授業は健康・栄養専攻学生も対象に実施され、健康・体育専攻学生と同じように就職を考える有益な実習となった。調査の結果や上級生の実習体験を今後の学生指導に活かし、年度ごとに変化する学生や実習先に柔軟に対応していく必要性が理解された。

参考資料

- 1) 文部省 (1998) インターンシップ等学生の就業体験のあり方に関する研究会報告
- 2) 文部科学省 (2003) 大学等における平成14年度インターンシップ実施状況調査結果
- 3) シェイク(株)04/05卒インターンシップ調査レポート インターンシップの成功モデル・失敗モデル
- 4) Stratta Terese M. Peretto (2004) The Needs and Concerns of students during the sport management internship Experience, JOPERD (Journal of Physical Education and Recreation, Dance). 75-2:25-34.